

おほせのつとめ

天にも地にもかゞやきて 夜の間ひるの間とこしへに

てらすみ光かうむりぬ われらいかにかむくうらん

聖きみむねをかしこみて ねてもさめてもへだてなく

ふかきめぐみをよろこびて 命のつとめをつとむなり

いのちの葉

夜半のあらしのはげしきに ふしたる草もいろかへて

時しも吹ける秋風の からさでのこす野邊もなし

あなかなしがる秋風の 草のみどりもくれないの

もみぢもともに吹き落す 落てはへだつる色もなし

花もみどりの千ぐさをも ちりぬかれぬと聞くからは

我身わがみもいつか秋風あきかぜに

ちりぬるものぞいのちの葉は

我身わがみ千とせ

とたのみしに いつまでこゝに有明ありあけの

月つきさへ西にしにかたむけり

たれもかたむけかのくにゝ

### 光明攝化

教主釋尊けうしゆしやくそん出いでまして

闇くらきに迷まよふ子等こらがため

ミオヤの光明ひかりを説とき示しめし

救すくひの道みちを教をしへにき

アミダは永恒とこの光ひかりなり

一切さいしよ諸法しよほふの據よる處ところ

諸佛菩薩賢聖しよぶつはさつげんじやうも

斯光このひかりにて得道とくだうす

如來みかどは光明くわうみやう圓まかにて

十方世界はうせかいを照てしては

念佛衆生ねんぶつしゆじやうを攝をさめ取とり

救靈すくひますこと極きはみなし

衆生しゆじやう至心しんに信樂しんがくし

光明くわうみやう名號なごう稱がうへつゝ

如來にょらいの慈悲じひを憶念おくねんし

早晚いつぱひかり心光こころのひかりに攝とらめられ

聖きよきみむねに滌そそがれて

光ひかりの中に安住やすむ時は

神かみは淨土じやうどに栖遊すまび

ミタの光ひかりを得る人は

行住坐臥ぎやうぢゆうざふわに如來にょらいを

三業さんごふ四儀しぎに作なす處ところ

命令めいれいの務つとめと知る時は

深ふかき恵めぐみに充みたされて

辱かたじけなさに動うごかされ

いよいよ此身このみの終はらりには

一もつぱら救靈すくひを祈いのりなば

罪つみに汚けがれし我われとても

聖きよき人ひととは更かへるべし

身みはまだ此土こゝに在ありながら

平和へいわ歡喜くわんぎの極きはみなし

時ときと處ところの分わかちなく

暫しばしも離はなれることはなし

皆みな悉ことごとく大おほミオヤの

佛行ぶつぎやうならざることやある

感謝かんしゃの念ねんより作なす業わざは

己おのれを忘わすれて進すすむなり

眞實しんじつ報土ほうどに生うまるべし

彼處は光明永しへに

照り輝ける寶國にて

常樂我淨の園生には

眞善美妙の花匂ひ

父子相迎の朝には

生佛一如の理をさとる

いとも賢こき同胞よ

讚めよ稱へよ限りなき

生命と光明に在ませる

天つミオヤを稱えかし

## 如來讚

みだのみいづはきはみなく

ひかりかむらぬものはなし

みちからひとりすぐれしと

あらゆるほとけほめまつる

みだのみいづのみひかりと

そのみさかえをほめまつり

つねにこゝろにたえせねば

きよきみくににうまるべし

あみだほとけのみひかりは

てらさぬところなかりけり

みなをとなふるひとはみな  
をさめてすてじときたま玉ふ

みだふかしぎのみさかえは  
こちたのさときことのはに

たとへこのよのをはるまで  
とくともつきじとの玉たまへり

くるしきうみにしづめるは  
こころのやみのふかきにぞ

むゐのみやこにいたるには  
あみだほとけをたのむべし

われらこころのやみふかく  
はてしもしらでさまよひぬ

すくひのみなをとなふれば  
ほとけよわれをたすけませ

## 因 地 願

われはほとけをえんまでに  
あまねくちかひをおこなひて

すべておそれるもののため  
おほきにやすきとならしめん

わがなすきよきみくには  
よろづのものもよにこえて

くはないをんのさかひには

よにたくらぶるものもなし

## 清淨光

(ひとの感覺即ち眼耳鼻舌身に感染する光、感覺清淨となりて靈徹す。) にごりにいで、いさぎよく、さけるはちすのかほりこそ

きよき光に開れし、人の心の花ならめ

あかねさすてふ朝日影、みるもまばゆく輝くは

清き光に照らされし、人の心にたぐひてん

みがきて照すまにの珠、ねりてかゞやくこがねこそ

きよき光にみがれし、人の心の色ならめ

雲をあらしに拂はせて、さやかにてらす秋の月

きよき光に照されし、心のすがたにたぐひてん

富士のたかねに白たへの、雪のすゞしき色こそは

清き光にみがれし、人の心のすがたなれ

## 歡喜光

(人の感情に感染する光。斯の光によりて心の苦惱うせて平和に歡喜にみちてうるはしき心情となる。)

くるしき海はかぎりなく、まよひはふかくそこもなし

めぐみの船にのりえたる、人の心は安らけし

うき世のうみは廣くして、なやみの風ははげしくも

めぐみのみなとに船とめて、やすらふ心はやすらけし

朝日にはふさくら花、八重こゝのゑはよろこびの

光に開きてうるはしき、人の心にたぐひてん

一たび開きてとはに、かはらぬ色はよろこびの

光りにあひてうれしさの、人の心の花ならめ

天にも地にもよろこびの、光はあまねくみちみてり

心の花のひらくれば、とはにのどけき春ならめ

## 智慧光

(此の光によりて人の佛知見ひらけてあなたの聖きみすがたと聖きみむねとを  
示さるゝ)

知慧光をあふぎつゝ、心の水のすみぬれば

こがねのすがた妙なりし、月のおもかけやどるなり

玉やこがねにかゞやける、きよきみ旨はさながらに

聖き光にみがゝれし、心のかゞみにうつるなり

智慧光の日やてらす、さまやの窓のひらくれば

無明にかくれしひめごとも、啓示さるゝなり悟るなり

妙なる法の身の月は、照さぬ所なかりけり

まよひの雲のはれぬれば、わがのきばにぞながめえん

## 不 斷 光

(人の意志に被る時は野卑の情操うせて金剛の意志靈化の道德心となりて活動す)

われらをすくはん爲ためならば、ならくの底きにしづむとも

しのびて悔くひじとちかひてし、そのみこゝろをあふげかし

われらがためにいくたびか、敷かをも知しれぬ身みをすぎし

ふかきめぐみと思おもほへば、身みをくたきてもむくはなん

つみにほろびしわれくを、すくふ方便てだてをたてんとて

五劫ごごに思おもをつくしたる、ふかきめ惡わるみを忘わするなよ

神聖正義しんせいせいぎのみひかりに、くらしつゝある身みとしらば

聖きよきみむねをかしこみて、命いのちのつとめをはげむべし

天てんにも地ちにもみちみてる、めぐみの光ひかりかむるなり

ふかき恵めぐみを思おもほへば、感かん謝しゃの心こころなわすれそよ

## 清淨光

朝日まばゆく照しては

如來の清きみ光は

さやかに照す月影は

如來の清きみ光は

清きみむねの浴池には

身に垢つけば浴みつゝ

塵にまみれし我が胸は

形の穢れは人眼に恥ぢ

清きみむねの鏡もて

無始にけがれし我がむねを

塵には日々に染みにける

紅顔眼にさえぎる時は

金剛石に反映し

念する心に輝けり

草葉の露に宿るなり

信する心に宿るなり

心の垢を滌ぐなり

衣にしみつかば濯ふなり

みむねの池に滌ぐべし

心の汚れは佛に恥ぢん

三たびわが身を返照せよ

さりとて自ら覺らずに

あな恥かしき我心

いつか心に染

淫聲いんせい耳みみに觸ふるゝ時ときは  
 不ふ（一）にむかへば自おのづから  
 戀こひすまじきをも戀こひし  
 眼めにふれ耳みみに對たいしては  
 己おのが心こころのきたなさは  
 げに恥はづかしき我わが心こころ  
 たとひ滄海そうかいかたむけて  
 清きよきみむねのみひかりに  
 悔くひあらためてきよらけき  
 まことに一己ひとみをさゝげ  
 清きよきみむねの功徳池くどくちに  
 聖きよき心こころとよみ更かへり

ゆるぎだす心こころのましら  
 かはる心こころのあさましや  
 想おもふまじきをもおもふ  
 心こころを汚けがす便たよりなれ  
 若もしも人眼ひとめにみへもせば  
 自みづらかへりみげにはづかし  
 滌そぐもいかで清きよむべき  
 己おのが心こころを恥はづかへよ  
 みひかりをたゞ仰あやぐべし  
 みむねの水みづにそゝげかし  
 無始むしのけがれもそゝがれて  
 無垢むくの衣ころもを身みにつけん

六根こくおのづと清きよらけく

神こころはとはに安やすらかに

聖旨みせめの水みづに溶とけぬれば

水みづに心こころはすみわたり

其その清きよけさは無なきごとく

かぐはしきこと例たとへなし

身みの輕安きやうあんはトロメンの

淨瑠璃じやうるり摩尼まにの如ごとくにて

見聞けんもん覺觸かくしよくことくくに

清きよき光ひかりに浴よくせずば

知しらぬむかしはいかばかり

清きよき光ひかりに濯そくぎなば

姿色ししきいつしか麗うるはしく

八切くどくち徳池とくちにすみわたり

水みづや我われかや我われや水みづ

照てり徹とほりぬる泉いづみには

深遠じんのんきはも覺おぼほへず

味あじはひ甘あまさかぎりなし

中なかにつゝまる如ごとくにて

八面めん玲瓏れいろうと輝かやけり

心こころを汚けがす世よにあれば

いかでか( )

罪つみに汚けがれし身みなりしぞ

雪ゆきの如ごとくにきゆるべし

我らは日々に世の塵に

されば日に日に幾度か

胸のあくたを捨ておかば

心も腐敗( )

赤き眼鏡もてみれば

清き光に磨かれて

眼にふれ耳に感るるもの

法眼淨き人は皆

清淨國土の莊嚴を

實は淨土遠からず

開きて見れば( )

日光明く照せども

まみれてけがれし( )

みむねの水に浴せかし

いやけがれてはつひにまた

清きいづみに洗ふべし

見るものすべて赤かりし

心識美化し此の土に居ながら

清淨國土に映ずなり

見聞覺觸悉く

( )

清き光に法眼を

( )

盲者は明を覺りえず

心の眼こゝろまなこのなき人はひと

心法眼こゝろのまなこひら開ひらきなば

如來にょらいふしぎ不思議ちからの力ちからにて

七重寶樹ぢゆうほうじゆの( )

百千種香しゆかうのかぐはしさ

身みはまだ此この土どにありながら

神こゝろとはに勝妙しやうめうの

### 智 慧 光

如來にょらいちみ智慧くわうみやうの光明くわうみやうは

佛智ぶつち不思議ふしぎの妙境めうきやうを

日光にっくわうあまね遍てらく照てらせども

いかで淨土じやうどを知見ちけんせん

清きよき御國みくにの莊嚴しやうごんは

現あらはれにける( )

八功徳池はつとくちの浪なみの音ね

清しやうりやう冷れいの風身かぜみに觸ふれぬ

清きよき光ひかりにあふ人ひとは

五塵ごじんの境きやうにすみあそぶ

衆生無明しゆじやうむみやうの闇やみを破はし

如實にょじつに啓示けいじし給たまふなり

盲者まうじやは見みること能あたはざ(り)

佛ぶつ日常にちじょうに輝かまくも

無明むみやうにさまよふ我々われくは

生うれ來きしとも行末ゆくすゑも

愚おろか上うへに愚おろか

斷常だんじやう二見にけんの深坑しんかうに

自みづから智ち慧ゑの眼まなこなく

凡夫ぼんぶの晝ひると驗しる處ところ

聖者せいじゃ知見ちけんの眞境しんきやうは

佛ほとけ陀だは如實にょじつに三界さいがいの

無明むみやうの永夜えうやに眠ねむりては

業識ごうしき所觀しよくわんの幻境げんきやうを

還かへつて本有ほんねの眞界しんかいを

心眼しんげんなくば知見ちけんせじ

自みづから智ちなく何なにれより

しらでも己おのれ知しりがほに

正まさなき我わが智ちにまどひては

陷おちること憐あはれなり

聖境しやうきやううたがふ愚おろかさよ

是これ聖人せいじんの夜よるにして

凡夫ぼんぶの爲ためには夜よるぞかし

相性さうじやう知見ちけんし給たまへり

生死しやうじの夢醒ゆめさめやらで

眞實しんじつ有うと誤認ごにんせり

疑うたがふ心こころのあさましや

如來の眞實靈境を

現在驗めし我が世をば

たとへば夢に在ると見し

此の世はアラヤの力にて

如來の眞實妙境は

智慧の光の照す下

佛智と相應する時は

如來大圓鏡智にて

生滅所現の影像は

十界三千因縁の

因縁如幻の( )

凡夫の智慧は自然( )

知見したらば今自己の

夢幻と自覺せん

物は覺れば非ざりしに

生死の夢に外ならず

夢の醒めたる處なり

深く如實の觀に入り

佛境悉皆現前す

因縁所生の萬象に

夢幻影化の如くなり

一切依正色心は

一如の海の浪なれや

天象地異萬物( )

一切事物の理をさとり

二乗慧眼の眞智にて

天地萬物悉く

佛慧の眼開くれば

依正色心悉く

一切萬法悉く

本來不生不滅なり

一切生者の五蘊より

四諦十二因縁も

相好十力十八法

一如の水の浪にして

淨穢本來不二にして

一切萬法知見せば

眞如の幻化の影なれや

佛の靈境現前し

如來智力の所現なり

如來智力の所現にて

永劫活用窮みなし

六根十二處十八界

六度四攝四誓願

乃至一切種智までも

本來空有を離れにき

迷悟は常に一如なり

我が妄想の風止みて

本如の智光と相應し

智慧の光に闇消えて

本來如來心にして

佛智不思議の境界は

我等は聞き身なれども

智慧の光を見る時は

知見せられて悟るなり

證入したる妙境は

言語と思慮も絶えにける

如來の妙觀察智にて

聖旨を啓示して

分別識智の浪もなく

眞理知見せらるべし

觀じ來れば我が心

生佛一如の理をさとり

妄想分別離れにき

自己の識を空にして

如來不思議の境界も

自證知見の極みにて

自然自證の處なり

衆生の心に感應し

眞理を悟らしむ

神通三昧陀羅尼門  
じんづう さいだらにもん

智慧光の用として  
ち ちくわう はたらき

諸佛無上の正覺も  
しよぶつむじやう しょうかく

智慧光の徳よりぞ  
ち ちくわう とくよりぞ

## 歡 喜 光

如來歡喜のみ光は  
にょらいくわんぎのみひかり

斯のみ光に合ふ人は  
このみひかりにあひひと

佛法醍醐の味は  
ぶつぽうだいごのあじはひ

禪三昧に酔ふときは  
ぜんさんまいによぶときは

斯のみ光を知らぬ身は  
このみひかりをしらぬみ

無常の火宅を栖かとし  
むじやうのくわたくをすまかとし

乃至不思議の佛法も  
ないしふしぎのぶつぽう

悉くこゝに通せしむ  
ことごとくにつうせしむ

一切種智悉く  
さいしゆちこうごとく

顯はれ給ひし作用なり  
あらはれたまひしさようなり

天にも地にも充滿てり  
てんにもちにもみちみたり

無比の快樂を感ずべし  
むひのけらくをかんずべし

靈を養ふ糧にして  
れいをやしなふかて

樂しさ極みなかりけり  
たのしみきばなかりけり

有爲轉變の世を欣ひ  
うゐてんべんをきんひ

あだなる榮花を食りぬ  
あだなるえいぐわをむさひ

世は幸福の器にあらず

心は常住のものならず

生死の海にさすらひて

はてしもしらで浮沈む

競争はげしき生存に

紅顔何時か老いしほみ

貴賤賢愚の隔なく

此の身は苦惱の器にて

愛に別離のなやみあり

やみにさまよふ人々は

煩惱菩提の因ならず

眞の幸福を欣ぶ人

身は快樂の具ならんや

自然は己がまゝならず

八苦の波に漂され

此の身の末やいかならん

渡るに難き生の苦よ

強健とても頼まれじ

終に死王に奪はれん

心は憂怖の具なるかな

怨憎會苦の苦に

苦より苦にこそ入りぞすれ

憂苦涅槃の果ならんや

早くミオヤをたよれかし

陀受法樂のみひかりは

己が心の奥深み

いと暖かなるみ光に

春和の靈氣にもよふされ

櫻の花のいろ香にも

靈なる和氣は暖く

入我々入のかぐはしき

斯の妙感に入りぬれば

斯のみ光に合ふものは

神はとはに極樂の

ミオヤの聖種を種として

七覺心の花ひらき

永恒に輝き逝るなり

我を捧げておほミオヤの

融合せんと欣ふべし

朝日にほふ九重の

なほ比ふべき我が心

靈の花の開くとき

彼此融合の快よき

身も融液ばかりなり

身はまだ此の土にありながら

花の園生に逍遙す

信念またく養はば

我等が心に咲きにほふ

天つ乙女の奏でける

ミオヤを念ふ心には

肉の我

見聞覚知悉く

教主釋尊悅豫し

光顔麗はしく在まし、は

肉に靈福感すれば

我らミオヤをたよる身の

慈愛に充てる笑顔は

融合彼此の感應に

浮世の風は吹すさみ

暖愛のみむねに慰まれ

絲竹のしらべも自ら

とはに聞えて

靈き我となる時は

淨土の快樂を感すべし

姿色清くましまして

ミオヤの恩寵に充たされて

白づと面に現はれむ

則をしめし給ふなり

靈戀に影見えむ

此の世の我とも覺はへず

肌をさける苦の中に

なほ歡びの光あり

隘せまき病びやう床しやうの室むろにても

天そらよりひろき天そらありて

戦た敗かひれて淵ふちに墜おち

心こゝろの底そこに耀よう々と

浮うき世よの責せめは身みに纏まとひ

中なかにもひとりの大おほミオヤの

我われ等らも遂つひに向むか上あては

極ごく樂らく無む爲な涅槃ねはん城じやう

常じやう樂らく我わが淨じやうの園その生ふにて

畢しつ竟きやう有う無むを離はなれたる

歡くわん喜きの光ひかりの（以下斷絶）

光ひかりを念おもふ心こゝろには

翅とび舞まひぬる觀おぼ想むあり

望のぞみの網つなはたゝれても

輝かく光ひかりは發はつ見けんせん

情なさけの枷かせ鎖せにつながれし

慰なぐさむ聲こゑはひゞくなり

ミオヤのもとに至いたりなば

法ほつ性しやう常じやう樂らくの身みとなりて

眞しん善ぜん美み妙めうの花はなにほひ

御み國くにに歸きして

# 不 斷 光

如來不斷の光明は

衆生の意志を攝め取り

まだ覺り得ぬ盲動は

風のまに／＼漂ひて

内に煩惱潜在し

我らが弱き意志

自ら己れを制しかね

我等の意志は卑し

肉我の慾に驅られては

自ら人の目的を

道德秩序を照しては

至善の靈國に指導さぬ

生の目的定まらず

しらず三塗に向ふなり

外には魔風吹きすさみ

優柔不斷の念々は

墮落の淵に沈むなり

肉の幸福追ひ求め

名と利を貪り飽き足らず

覺らで三途に盲進す

主我の動機は日々に

自ら自我を覺醒し

なほまた己を卑むる

茫々として世に（一）り

肉の我の非を覺り

我等は至善ミオヤなる

如來は至善の主に在して

如來は我等を終局の

攝取のみむねを現はして

聖き光に

聖旨の光に聖められ

ミオヤの聖旨を意として

八億の念（一）

自己の弱きを認めては

氣質の缺點自覺せよ

玄津何れに求めえむ

全く聖旨に投じては

如來によりて道をえむ

我を攝取したまふなり

至善の都に誘はん爲

不斷光を放ちます

自己の非惡を改めて

聖き我とは生れ更り

聖子の員には入りぬべし

不斷の光の指導にて

終局の目的定りて

如來は我等がみ親にて

如來の威神は儼かに

神聖正義の光にて

不斷正義の光にて

三業四儀の作す處

ミオヤの慈悲はいと深く

汚れし我を哀みて

深き慈愛に感じては

不斷の光に自から

不斷の意志に二面あり

眞善美妙の靈界に

念々歩々に向上なり

我らは如來のみ子ぞかし

我らが意に照臨し

道徳律をたゞさしむ

勇氣は易く身に満ちて

聖旨を顯はすつとめなり

罪に没びし子らがため

聖き心を養ひて

おのづと楽しくすゝむなり

善より善にすゝむなり

願作佛と度生心

願作佛とは向上心くわんさくぶつ かうじやうしん

我法王の子としてわれほふわう こ

徳行を普賢に學んでとくぎやう ぶげん まな

聖旨を現はす力行にてみせね あら づとめ

願度生とは向下心くわんどしやう かうげしん

同胞意志を發してはだうほういし おこ

人に對する同情をひと たい どうじやう

拔苦與樂の慈悲をはつくよらく あはれみ

志願を勢至と同うししきわん せいし おなじ

淨きみととに歸せざればきよ きととにき せざれば

不斷の光に返照しふだん ひかり へんせう

不動の智劍に惡を切りふだう ちけん あくをきり

理想を文珠に倣ひてはりきやうもんじゆ なら

一切の佛法求むなりさいい ぶつほふきと

萬善萬行悉くまんぜんまんぎやうことごと

不斷の光によればなりふだん ひかり

ミオヤのみむねを心としみおやのみむねをこころ

共に至善に誘導すとも しぜん ゆうどう

觀音菩薩に習ひてはくわんのんはまつ なら

普く衆生に施さんあまね しゆじやう したご

衆生と共に大ミオヤのしゆじやうとも おほ

我いかにして作佛せんわれ いかにして ぞぶつ

己が非惡に對してはおの ひあく たい

三昧の索に非を縛りまい つな ひをしば

聖意みせねの光ひかりを意こころとし

八億やく四千せんの念ねん々くも

日は徒いたづらに過すぎなまし

淨土じやうどに在ありて百歲さいの

然しからば如何いかなる苦難くなんにも

他人たにんの罵詈譎はりざんぱうも

悦よろこびいさみて

いかなる險阻けんそ荆棘けいきよくも

自己じこが意志いし( )

人生肉じんせいにくの幸福かうふくを

聖きよきみ國くににすゝみゆく

不ふ斷だんのみむねを得うる時ときは

三業さんごふ四儀しぎのなす處ところ

皆みな佛行ぶつぎやうとなりぬべし

此この土どの一日いちにちの精進しやうじんは

徳とくを積つむにも勝まされりと

甘かん受じゆ安忍あんじんせらるべし

我われを研みがく機き會わいぞと

一しん心ゆ勇猛ひやうまう精進しやうじんべし

通とほり貫つらぬき果はてぬれば

安意やすき大道だうだう得うらるべし

求もとむる爲ためにあらずして

階かいてい梯いとこそきこゆなれ

いかなる娑婆しゃはの事業じぎやにて

敗まげになりても頼たのもしき  
 八風はつふうはげしき世よの海うみの  
 不斷ふだんの燈光たうくわうたつきとし

希望きぼうの光ひかりは類たみなし  
 迷まよひ易やすき意志いしなれど  
 涅槃ねはんの岸きしに到いたるなり

安養界(無量壽經上卷)

我わが如來にょらいの靈國みくになる  
 いと清きよらけき法のりの身みは  
 玉たまの宮居みやゐに住居すまゐして

聖龍めいりゆうに活いける聖衆しやうじゆう等らの  
 萬よろづの功德どくせな具ぐはりぬ  
 衣服えふく飲食おんじきけ華香かうかう等ら

すべての莊嚴じやうこんおつ自おつから

こころに食うけを欲おもほへば

金銀瑠璃寶珠こがねしろがねるりほうしゆ

意こころの隨まにまに至いたりては

色いろを見香みかを嗅かぎ食じきせりと

思食しじきに持もてる法のりの身みは

妙味めうみ極きはなく覺おほはえて

無爲泥洹むゐぬいそんの都みやこなる

眞善微妙しんぜんみせうの華はな匂におひ

彼かこの聲聞しやうもん菩薩衆ぼさつしゆ

余方よほうに準なぞらひ人ひとてふも

容色ようしきいと妙たにして

第六天だいろくてんの物ものの如ごとと

寶たからの食器じきき現あらはれぬ

明月摩尼みやうくわつまにの盃はちのごと

百味ひゃくみのうけは盈滿みちみぬ

以おもへば自おのづと飽あかんとぞ

心こころは常つねに安やすらけく

味著みぢやくの憂うれふこともなし

常樂我淨じやうらくがじやうの國土こくどには

樂たのみ極きはみなかりけん

智德圓ちとくまどかに具そなはりて

實じつは薩婆若さばにやの一味みなり

天てんと人にんとにあらざりし

自然に虚無の身をうけて

如來の靈なる糧をうけ

みおやの甘露のうけにより

無極の體にいますなり

聖子らが法の身をたすけ

靈の生命は支ふなり

## 無量壽經下之卷

厭へよ濁れる世、生活の難、富貴の苦

如來は眞理にましますば

自然法爾に泥洹に

心の闇に惑ふてぞ

無始より已來さすらひて

愚か世の人薄俗に

劇惡極苦の世のなかに

聖旨に隨順する者は

到達すべきをいかなれば

眞に背き妄に依り

自ら苦惱を迎ふるは

よしなき事を争ひて

營み勤めて世を濟り

貧富貴賤おしなべて

財と金を貪ぼりて

生存競争けはしきに

屏營愁苦いとまなく

心の爲に走使され

田宅あれば田宅に

其佗衣食資具の類

一たび己に得るときは

圖らざりしも非常なる

詐僞横領の難のため

憂愁胸を割ばかり

鬱憤胸に結ばれて

少長男女のわかちなく

有無とも憂等しけれ

互に肉を噬合ひて

煩悶胸に斷間なし

安き時だにあらざらん

奴婢六畜をはじめとし

憂のかゝらぬものやある

我有の執心深かるに

水火盜賊或はまた

焚漂劫奪被むれば

惱々解る時ぞなき

憂惱ながく捨てがたし

明春神を煩はし

貯蓄は藏に積けるも

二の眼地に落て

たとひ死骸をよそほひて

神は迷途にさまよひて

いかに尊貴豪富とて

憂苦萬端は悉く

煩惱業の因あれば

貧賤の勞

貧窮下劣の輩は

田宅其他衣食等

此も不足彼も缺て

寤寐に念を惱つゝ

爲に命はちぢめては

一すじの息とゞまれば

虚飾の葬儀は營むも

つき随ふものなかりけり

斯る患は免れじ

我欲の動機によるなれば

未來の苦果は結ぶなれ

困乏常に身にせまり

衣服資具えまほしく

身心俱に勞すれど

なかく我身につきがたく

膏をしぼりし勞力も

氷をたゝきて漁どるも

憂と惱に伴ひて

また寒熱と戦かひて

一生空しく口腹の

賭して天に死するまで

人と生れし甲斐もなく

未來に貯ふ功德とて

ましてや永遠に救はるる

自業の繩に縛されて

憂世の浪 憂憎報復

立居起臥安からず

半ば債主の犠牲なり

みな豪富に供すなれ

勤苦すること斯ばかり

今日とて安き時もなく

奴隸となりて命をも

追ひ役はれて果つるとは

人の人たる道もなし

微塵ばかりもなかりせば

道は夢だにしらざりし

またも三途に落るなれ

愛憎心に繋ぐれば

因果の車は休間なく

人の心の常なきは

世の人父子兄弟や

親屬意に適ふとき

たとへ金錢財寶も

そが爲ならば何物か

貌も言も和ぎて

頼みがたきは人心

今日の暴雨とかはりゆく

恙の炎がほのめきて

己れ憎しと枳の

怨親報復をひきむすぶ

めぐりて世間に現はるれ

愛憎違順定まらず

または夫婦中外の

互にしたしみ敬愛し

共に融通し合ふては

貪惜すべきと快よく

違戻することなかりしも

昨日の日和も忽ちに

一朝心に逆はば

胸に結ぼる恨の根

種を含めるたましひは

いつかは荆とげの木きとなりて

今世このよの恨うらみはすこしだに

實げに世よの中なかの事ことどもは

即時そくじに花果はなみは結むすばねど

萌發はうはつちやうせい長成ちやうせいしたる日ひに

怒いかりを蓄たくはへ毒どくを含かくみ

自然しぜんに剋識こくしき時ときいたり

打ちつうたれて何なんれかに

闇やみの世よに光ひかりを求もとめよ

此愛欲このあいよくの世よのさまは

去さるも來きたるも獨ひとりにて

苦樂くらくの處ところに趣おもむきて

彼かれをさゝでや置おくべきと

後世のちのよに大怨だいをんとなる

ここに結むすびし果みしあれば

蒔置まきおく種たねはいつかまた

必ず果かを結むすぶごと

憤いかりを精神こころに結むすびたる

當まさに互たがひに對生たいしやうし

必ず報復かへす時ときは來こむ

獨ひとりり生うまれて獨ひとりり死しし

人々ひとく自業ごふじ自得とくなる

代かはるものとなかりけり

さまざまかはる人心ひとこころ

されば果報くわはうも區々まちまちに

何れいづも昔むかし豫備よびせしを

遠とほく他所たしよに生うまれなば

善惡ぜんあく自然しぜんに其行そのぎやうを

窈えうに冥々みやうみやうわけがたく

六道路だうみちを異ことにせば

やよ人ひとよしなき樂らくを捨すて

勤つとめて善ぜんを修おさめつゝ

永遠えいゑんの生命いのちに常住じやうちゆうの

いかにて道みちを求もとめざる

此身このみのはてはいかならん

今善いまよき人ひとも惡あくとなる

禍福くわふく位置ちを異ことにする

時得ときえて結むすぶ果みにぞある

いかでか再ふたび見合みあふべき

追おひて受うけにし身みにあれば

別わかれゆく衛へは何處いづこにか

また會あふ期ときはなかるらん

強健かうけん有力うりきの時ときにこそ

勇いさんで救すくひを求もとむべし

平和へいわに入いるべき道みちをえよ

何なんの樂らくをかまつべきぞ

能よく自みづから願かへりみよ

闇の源

寔に淺まし世の人は  
業力保存の自然にて  
惠施の福田植おかば  
光の道にすゝみなば  
善惡業道あけきをも  
己れしらすも因果律  
日々目前に見ることは  
あはれ凡夫の愚かさは  
因果の道理も辨へず  
さとるよしなくいたづらに  
外にしるべきこともなく

善惡因果の理にくらく  
死すれば更に生をうく  
必ず好果は得べかりし  
必ず光に達するも  
みな然らずとおもひてぞ  
自から受るしるしには  
誰が蒔き置し因よりぞ  
先々祖父も理にくらく  
ましてや救の道などは  
肉の生活わたるより  
實に淺ましき世の人や

されば家庭の素養とて

家憲家則の教令も

心霊永遠に救はるる

轉展相續重ねては

惑の繩につながれて

善をもなさず道徳も

神聞く意閉ぢ

道の歸趣する處をば

諭すものとして無りせば

看よ時々ときどきに襲おそひ來きし

何いづれの原因もとより來きたりしと

自作じさじゆ自受じゆの理りにくらく

眞理しんりにくらき闇やみのうち

形肉けいにくを嗣つぐ事ことのほか

法はふのことには及およばさず

祖先そせんの源もとよりつなぎ來きし

子々孫々しきせんくも悉ことごとく

知らず累代るんだい襲おそひしは

死生しせいの趣おもむき善ぜん惡あくの

自みづか覺さとり能あたはねば

あはれといふも愚おろこかなり

吉凶禍福きつこうくわふく襲おそひしは

怪あやまざるこそ怪あやしけれ

天てんを恨うらみ地ちをとがめ

方角ほうかくまたは星宿せいしゆくに

まことに愚おろかのきはみなれ

有爲うゐ遷流せんりゅうの世よにありて

生死しやうじの常つねの道みちとして

壽命じゆみやう長ちやう短たん中天ちゆうてんの

有爲うゐの常規じやうきを覺さとらねば

また子こにして父ちちを哭こくし

互たがひに哭泣こくきゆうし合あふこと

更さらに道みちにはあらざれば

生死しやうじの眞理しんりを明あきらめば

無常むじやう遷流せんりゅうの常規じやうきにて

本もとより定またまり有あるものを

受うく災禍わざはひとおもふこと

分段ぶんだん生死しやうじをうけし身みは

展轉てんくわん相續さうじやく嗣立すたつす

不定ふぢやうは有爲うゐの常つねなれど

或あるは父ちちが子こを哭こくし

兄弟けうだい夫婦ふうふ親おんみの

いかに哭泣こくきゆうするとして

さればぞはやく道みちを聞きき

痴哀ちあいの悲慟ひだうはなきものを

生者しやうじ必滅ひつめつ會者けいしや定離ぢやうり

さりとは思おもはで我わればかり

獨り憂目にあふものと  
 みな是顛倒の本にして  
 眞理の自然を教ふれど  
 なべてまよひの深きより  
 斯の如きの輩は  
 眞理の教を信解せず  
 遠きを慮る理にくらく  
 愛と欲とに惑ひては  
 己が意に順はずば  
 財と色とを貪ぼりて  
 明き道にたよらねば  
 生死窮りなかるべし

自からかこち他をうらむ  
 無常の根とはいふべけれ  
 まことに解するものはなく  
 生死流轉のきはみなし  
 瞿冥抵突  
 たゞ目前に眩みては  
 生死の快樂追求め  
 眞理の道に達り得ず  
 曠怒のほのほに目はくらみ  
 明暮神を煩はし  
 更に惡趣の苦を受る  
 いかに哀につたなけれ

痴愛の悶

或は無常の夕あらし

親子兄弟妹と背の

遣りしかたの悲しみは

朽はてずして獨りのみ

恩愛腸を斷つばかり

哭泣天に訴ふも

悲嘆をわかつみちもなく

幾日経れども願戀して

道の諭を被むれど

なごらく心は開けえず

たゞ恩好を思ひては

家庭の花を吹ちらす

わりなき中をも獨り死し

など諸共に苦の下

憂を見る目のいたはしさ

慕ふ思はむすばれて

悲慟地に伏しなげくとも

悼傷遺る瀬もあらばこそ

歳は卒れど解がたく

固く結びし痴哀には

哀情解くべきすべもなし

實にぬば玉の闇心

くらしき惑に覆はれて

端正しき己にかへりてぞ

世事を決断なしがたし

壽命は終につくれども

またいかんとも爲し難し

猥りがはしきたはむれに

またも得がたき人生を

動物欲のみ貪りて

悟るはまことに寡けれ

げにあだし世は常ならず

尊き卑きおしなべて

迷の隙に閉られて

自から思ひ計りては

專精に道を行ひて

たゞいたづらに日を送り

道を得ること能はずに

斯る痴愛の輩は

みにくさ言むかたもなし

眞面目に生活こともなく

道に惑へる者多く

頼むべきものなかりけり

賢愚上下のへだてなく

生存競争に目もくらみ

我欲の動機にかられては

天に逆らひ理に戻り

良心已に癡痺しては

慚愧の心もなかりけり

罪の極り待つのみぞ

己に悪道に墮落して

忽ち魂奪はれて

長く苦患を受ぬれば

ほとけ彌勒に告給ふ

まことに愚か世の人の

熱つら思ひはかりては

各殺毒を懐きては

妄に事を興さんと

また人道にも従はず

非悪と自らゆるしても

恣まゝに所爲をなし

生ながらその精神は

未だ壽も盡ざるに

獄火の中に没入る

出づる期だにあらざらん

我今汝に語てし

かゝればつひに道を得じ

すべての悪は遠ざかり

善きこと擇みてつとめかし

しばしのほどに消はつる

佛の在す世に於て

至心に淨土を願ふ者

功德殊勝なるを得よ

眞理のおきてにそむき

人後におつることなかれ

前には至りて愚なり

若しも疑雲に覆はれて

具さに佛に問よりて

みろくぼさつは長跪して

佛はみいづいと窺く

愛欲榮花春の夢

まことに樂しきことやある

當につとめはげむべし

智慧明達に

心をほしきまゝにして

まことの道にいそしみて

世の智慧はみほとけの

其智によりて道を見て

まことの法を解せざれば

まことに説明さん

佛に白して言しける

説き給ふこと快し

いまはみ教をしへ聴ききまつり

實げにのたまへるごとくにて

みおやのじひのふかきにて

闇やみ夜よに燈とも火しびえたるごと

長ながく度ど脱だつを被かうりて

斯かくもたふときみ教をしへに

上かみは諸しよてん天てん人にん民みんより

救すくの慈じ悲ひを蒙かうりて

佛ぶつ語ごの教けう誠かいいとふかく

智ち慧みの日にち月げつ照つてしては

大だい小せうあらゆる事こととして

今いま我われすべての人ひと々と

つらくおもふに世よの人ひとは

今いまみほとけは子こをおもふ

明あかるき大だい道だう示しめします

明あかるきみちをえ

まよふべくも思おもほへず

歡よろこばざるものなかりけり

下しもはいきとしいけるもの

迷まよひの憂ゆう苦くを解げ脱だつせん

げに清きよらかに潔いさぎよし

横よこに十じゅう方たて堅げんに三さん世ぜ

照てらし給たまはぬこともなし

度と脱だつを蒙かうること得うるは

みなみほとけがむかし世に

身をへりくだし苦を忍び

恩徳普く被らしめ

智慧光明さややくも

涅槃の門を開きては

眞理の教は保たるゝ

威儀に制裁備りて

三業圓かに備はりて

佛は法の主にまして

普く人天の師と仰ぎ

機類にしたがふ望には

今は佛にあひ奉り

道を求むる爲ならば

功をつもりし結果なり

福德たかしいや巍し

照さぬくまもなかりけり

すべての生をみちびきぬ

人の眞知を開かしめ

道徳自然と化せる

十方感動極みなく

尊さ衆聖に超え給ふ

かなへる道を得せしめぬ

みだの光名を聞まつり

歡喜くわんぎたとふるものもなく

佛ほとけみろくに告給つげたまはく

佛ほとけを欽敬きんけいする者は

天下てんげ久ひさく久ひさしくて

今我いまわれ此土このどに出いで

道教だうけう宣布せんぷすることは

迷まよの本もとを抜ぬかしめて

佛ほとけは本もとより自在じざいにて

眞理しんりを攬とる智慧ちゑは

若もし大綱たいかうを執とれば

五道だうの關せみを照てらしては

未いまだ度どせざる者ものを度どし

心開こころかい明みやうえたりにき

汝なんぢが言いふこと實げに然しかり

實げに幸福かうふくといふべけれ

乃すなはち佛出ほとけいにけり

佛ほとけの法ほふを説とのべて

すべての疑惑ぎわくを除のぞきては

衆惡しうあくの源みなもとを塞ふさぐため

三界遊步がいじゆうぶさはりなし

萬法ばんほふをさるとる至要しえうなり

すべての事理じりは明あきらむれ

救すくひの光ひかりを與あたへたり

生死しやうじと涅槃ねはんの道みちを分わけ

生死しやうじのちまたを出離しゆつりして

彌勒みらくよ汝なんぢ多劫たかふより

衆生しゆじやうを度とせんと願ぐわんを立て

汝なんぢにつきて道みちを得えて

爾なんぢと及びおよ十方じふちうの

永劫やうがふい已いら來ら流轉りうてんして

憂惱うのう怖畏ふいいくばくぞ

乃至ないし今世こんぜに至いたるまで

今は佛ほとけに相遇あひあうて

殊ことにかしこき阿彌陀佛あみだぶつの

いかばかりかは嬉うれしきぞ

汝なんぢ自ら覺さとりては

涅槃ねはんの都みやこに導みちびきぬ

菩薩ぼさつの行ぎやうを修をさめては

已すでに久ひさしき劫がふを經へぬ

涅槃ねはんに入るもの數かず多おほし

諸天人民しよてんにんみんことくく

五道だう悉ことごとく經へめぐりて

具つぶに言いこと難かたからむ

生死しやうじのきづな斷たちた

法の教をしへを聽受ちやうじゆして

眞理しんりを聞きくこと得えたりしに

吾われも同情どうじやうに勝たへぬなり

生死しやうじ老病らうびやうの苦くを厭いとひ

此身は惡露不淨にて

宜しく自ら決斷し

ます／＼善に向上し

心の垢を洗浴し

表と裏と相應し

轉々互に策勵し

至誠精明に求願して

一世の勤苦は須臾のほど

快樂極ることもなし

生死の苦根を拔出でて

命は千劫恒沙劫

彼は無爲の涅槃城

是快樂の器にあらず

身と行を端正し

已を修め體を淨め

言と行とを忠信に

人能く自から度するなれ

共に救ひ救はれむ

多く善本をつもりなば

後に淨土に生れなば

長く道徳と合明し

三毒苦惱の患なし

自在に意のまゝにして

自在自然の處なり

汝ら宜しく精進し

疑惑をいだきて中ばにて

疑ひ邊地に墮しぬれば

みろく佛に白しまつる

專精におさめ學びては

必ず往生することと

廢 惡 進 善

佛みろくに告給ふ

心を端し意を正し

甚だ至徳と名づくべし

いかにとなれば諸佛土は

自然に善にかなひては

心の所願を求むべし

悔て過ることなかれ

五百歳中厄をうく

世尊の御さとし被むりて

教のごとくに奉行して

敢て疑ふことあらじ

汝らよくこの世に於て

すべての惡を作さざるは

十方世界に比なし

人天の類悉く

大に惡を作さざれば

開化すべきにいと易し

五惡五燒五痛なる

この群生をさとしては

五痛と五燒を捨離せしむ

五善を持して幸の

またなき道を獲せしむる

何が五惡を消化して

即ち世尊告げ給ふ

及びいきとし活るもの

我愛我欲より起る

すべての惡を爲さんとす

今我此土に作佛して

中にて教化なし難し

五の惡を除かしめ

進で其意を降化して

度世長壽泥洹の

何か五惡五痛五燒なる

五善と度世を獲しむるぞ

其一惡とは諸天人

生理の自然に驅られては

動機は自然惡にして

みな然らざるものはなし

生存競争はげしくて

轉た互に剋賊し

迭に相呑噬し

惡逆無道の報いには

業道自然にめぐり來て

犯せる者は赦されず

貧窮下賤乞匄や

または愚痴と弊惡と

或は尊貴豪富にて

皆是宿世に爲す業の

愚や世にも王法の

惡を作りて罪に入り

弱者は強者の肉となり

殘害殺戮きはめては

善を作すを知らざりき

後に殃罰免れず

神明たしかに記識して

看よ世の中にさまざまの

孤獨聾盲はた瘖瘂

猖狂不具の屬あり

高才明達なるもあり

報ひ來りし結果なれ

牢獄あれども畏慎せず

其刑罰を受る日に

解脱げだつを要求えうきうせんとて

自然しぜんの一分ぶんの此世このよにも

ましてや自然しぜんの本もとにして

壽終いのちおはりて後の世のちに

其幽冥そのゆうみやうに入りてより

王法刑罰わうはふけいはつあるごとく

身みをかへ形かたちを改あらためて

壽命じゆみやうは業ごふに随したがひて

魂神こんじん自ら趣おもむきて

害がいし害がいされ共きやう生しやうして

殃惡わうあく未いまた盡つきざれば

天地自然てんちしぜんの趣ことりは

いかでか免まぬれ出いづべきぞ

目前まへに見みることなるに

因果いんぐわう應報おうほうなからんや

尤もつとも深ふかく尙劇なほはげし

生じやうを轉てんじて身みを受うけ

自然しぜん三塗さんずの苦惱くのをあり

六道だうみち々々を易かへてより

或あるひは長ながき短みぢきと

自みづから作りて自みづから受うく

報復ほうふく已やむことなかるべし

出いづる期きとてはあらずらむ

即時きくじに暴たらまちに至いたりしも

善惡の道定まりて

之を一大惡にして

苦を受ること斯ばかり

人能く斯る中にして

身と行を端正くし

衆の惡を爲さざれば

度世洄泥の道を得ん

## 二

其二惡とは人民が

都て義務の心もなく

淫逸奢侈はしきまゝ

至誠の心なかりせば

會らず當に歸すべけれ

一痛一燒とは名づく

譬は大火の身を燒くに

一心己を制しては

獨りすべての善を作し

身獨り度脱して

是を一大善と爲す

父子兄弟夫婦は

法度禮儀に順はず

己が快樂のみ求め

互に欺惑し合ふならん

心と言と異にして

佞諂 不忠にて

賢を嫉み善を誘り

主上 明ならずして

臣下 利慾たくましく

實賤躬行範を成し

位に於て正なくば

妄りに忠良を損しては

臣下は君を欺きて

兄弟夫婦知己等

各胸に三毒を

只己のみ厚うして

言と念とに實はなく

言を巧みに諛媚ひて

怨柱に陥し入る

臣下を任用するときは

機偽 こと多端なり

其形勢にこそ信伏す

自ら欺き他を欺き

天の心に應はざれ

子はまた父を欺きぬ

互に欺誑し合ふては

懷きて他人を排斥し

多く有らんことねがふ

尊卑上下おしなべて

家を破り身を亡し

親屬知己に至るまで

或は家室の知己

みだりに事を起しては

互に怨りつ怨られつ

富有なれども慳惜し

寶を愛し名を求め

かくしてつひに竟りても

獨り生れて獨り死し

唯善惡禍福のみ

或は樂處に生をうけ

心は俱にみな然り

前後をだにも願みす

害を被らぬものもなし

郷黨野人など

互に害をなさんとす

怨み怨まれあだをなす

常に情を施さず

心を勞し身をいため

恃べきかた更になし

一りも隨ふ者はなし

命を追うて生るなれ

または苦毒の中に入り

後のちにいかほど悔くいるとも

大おほかた世間せけんの人民じんみんは

善ぜんを見みては憎謗ぞうぼうし

但たゞ惡あくのみを爲なさんとて

常つねに盜心たうしん懷いだきては

無益むえきの事ことに費つひして

邪心じやしん内に正ただしからざれば

豫かねて覺悟かくごなき時ときは

今世こんぜに現げんに王法わうほふの

罪つみに隨したがひ拘引ひかれては

曾かつて宿世しゆくせにありしとき

身みに善本ぜんほんを修をさめず

何なんぞ及およぶべきものぞ

心愚こころおろかに智ちかけて

慕したひ及およぶなど思おもはず

妄みだりに非法ひはふのみを作なし

他人たにんの利益りえきを羨望せんぼうす

權謀けんぼう求索きうさくを事こととはす

人ひとの色いろあること怖おそれ

事こと至いたつて悔くいぬべし

牢獄ろうごくありて犯をしたる

其刑罰そのけいばつを受うくるなり

道徳だうとくを信しんするなく

今いままた罪惡ざいあく犯おかしては

天神てんじんこれを剋識こくしきし

壽終いのちをはりて神逝たまひゆき

故ゆゑに自然しぜんの三塗さんづなる

一たび中なかに入りぬれば

いつとて解わかる時ときもなく

是これを二大惡だいたくにして

勤苦ごんくすることかくばかり

人能ひとよく中なかにて一心しんに

獨ひとり諸もろくの善ぜんを爲なし

## 三

其三惡そのあくとは世よの人ひとが

共ともに天地てんちの間あひだに在あり

其名籍そのめいせきを別わかちなば

惡道あくだうの中なかに下入げとしいる

無量むりやう苦惱くたう受うくるなり

世々せせ累劫るゐかふに出いでがたし

痛いたみは言ことばにのべられじ

二痛つう二燒せうとは名なづくなり

譬たとへば大火たいくわみ身を燒やくに

意こころを制せいし身みを端たまし

すべての惡あくを爲なす勿なかれ

## 三

因緣いんねん相あひ因より寄生きしやうして

年命ねんみやう幾いくはく干くなるもなし

上かみに賢明けんみやう長者ちやうじやあり

下しもに下賤げせん貧窮ひんきゆうや

中なかに不善ふぜんの人ひとありて

但たゞ姪送いんじゆうを念おもほひて

愛欲あいよくの火ひに焼やれては

嬌色きやうしきを晒めんらいして

貞婦ていふを空房くうぼうに泣なしめて

爲ために家財かさいを費損ひそんして

交々こまごま聚會しゆうかいを結びては

攻めおびやかせし殺戮せつりくし

家を齊いへふ意とこななく

詐偽まぎ竊盜せつたうして得うる時ときは

尊貴そんき富豪ふがうなるもあり

厖劣わうれつ愚夫ぐふの輩やからあり

常つねに邪惡じやくを懐いたいては

煩わづらひ胸むねに満みみてり

寤寐ごびに心安こころやすからず

放蕩ほうたう縱逸じゆういつ憚はまらず

私妄みだりに入で出ししまりなく

事こと非法ひはふを爲なさんとし

いくさを起おこし相伐あひつちて

強奪かうだつ不道ふだう限りなし

自みづから活業なりはい修をまめえず

忽たちまち遊樓ゆうろうに蕩盡とうじんす

威嚇脅迫等により

恣がまゝに快意して

或は親屬知己にまで

親屬尊卑もはゞからず

親類縁者も悉く

斯る痴狼の輩は

是の悪人鬼に著はれて

神明認識し給へば

無量の苦惱ともないて

出る期さへもあらざれば

是ぞ三の大惡にて

譬ば大火に人身の

己が妻子を歸給する

身の逸樂を貪りぬ

尊卑のわかるゝ心なく

道ならぬ事爲す故に

患ひ惱まぬ者もなし

王法の禁を畏れざる

日月照見し給ひて

しからは自然に三塗あり

中に展轉累劫に

いかで解脱を得べけんや

三痛三焼と名づくなり

焼かるるごとくに苦しけれ

人よく一心意を制し  
獨り諸善を作りては  
福德度世泥洹の

四

其四惡とは人民が  
轉相習ひ感染して  
弊風卑俗に染まりては  
互に讒謗し合ひ  
或は綺語して憚からず  
善人をば憎嫉し  
父母には孝せず  
朋友に信もなく

端身正行なすときは  
すべての惡を作さざれば  
道をえ三大善となす

善を修めん思なく  
衆の惡に習ふなり  
自然と惡に化するなれ  
惡口兩舌妄語等  
讒謗または鬪亂し  
賢明者をば敗壞す  
師長を輕慢し  
至誠眞實更になし

自ら尊貴自大して

横に威勢をふるまひて

自己返照の知なければ

自から強健なればとて

天地神明日月に

肯へて作善の意なく

自から用つて偃僂して

冥慮恐るゝ所なく

是の如きの衆惡は

前世に於て積み置きし

小善扶掖し來りては

今世に爲せる惡により

己道ありと謂へり

世の人をば侵易し

惡を作せども恥もなく

人の敬まひのみ欲み

畏れ憚るゝもなく

降化すべきこと難し

當に斯あるものと謂ふ

常に僣慢をいだくなり

天神記識し給へば

福德之に報いて

營護の助によるなれど

福德つひに滅盡す

諸善神も離るれば

今此壽命終りなば

自然にせまり近きて

其名籍は神明が

殃罰に牽引れて趣かん

積りし罪の薪火にて

身心ともに碎かれて

已に斯時に當りては

天道自然の律をば

斯れば自然に三塗には

中にて展轉累劫に

冥に依頼すべきなし

衆の惡の歸す處

惡道に趣き到るべし

記しおきあれば誤たす

罪報自然に捨てがたし

火鑊は沸してさしかまふ

精神痛苦極みなし

悔とも何ぞ及ぶべき

蹉跌すべき理なし

量りもしれぬ苦惱あり

出る期もなく苦めり

## 光明大師の讚

歸命頂禮阿彌陀尊

善導大師と身を化して

大師應化の生縁は

明勝法師の門に入り

或時淨土の變相を

質を蓮花に託しては

其年二十に滿ぬれば

同伴戒師と觀經を

眞の佛道の要律は

今我是に遇ふことは

方便不思議の力より

大悲の弘願を現はせり

希有にて測りがたかりし

法華維摩の經を誦み

瞻みて深く歎くらく

神を淨土に栖まさなむ

進みて具足の戒をうけ

讀してよろこび身に徹し

唯此法に如くはなし

波に船を得たりしと

如來の教門多けれど

大藏經を手に任せ

誦習し如説に行じては

廬山に遠師の躅を見て

四方の名徳訪ねては

其内微にして理深きは

是より萬縁放下して

跡を悟眞に遯れては

三昧成就の兆には

已に業事成ずれば

西河にいます綽公の

秋風落葉吹散し

機に應はずば成り難し

探るに觀經を得たりしに

勇猛に精修し給へり

豁然と意を彌増しぬ

出離の要路求めしに

念佛三昧に如くはなし

畢命爲期にはげみけり

一向專修功を積み

寶閣瑤池現前す

宜しく有縁を益せんと

業を慕ふて行く途に

深き坑にぞみちぬれば

瓶鉢提げて坑に入り

時に空中聲ありて

警告を被ひり道緯の

欽しみ夙志を白しければ

大師三昧の深詣を

我往生の得と不を

道俗競ひて度を求む

蓮を採りて行道し

長安城の瀧水の

示に依りて化を傳ふ

法輪轉た熾かんにて

慈悲熱誠の溢れては

念佛三昧に日を累ぬ

疾く此處をさりゆけと

御許に参りて禮謁し

觀無量壽を授けらる

緯公も尙敷服し

却つて師よりたづねらる

往生決疑の兆には

花萎ますば往生す

聲に念佛を弘めよと

機感や時を得たりけん

長安城に充にけり

四部の弟子等を激發す

貴賤賢愚の分ちなく

金剛法師と念佛の

佛像光を放ちては

慧謙慧感の英傑も

觀經の疏義の經文の

種々の靈感被りて

入りて自行を勵みては

出でて淨土の法を説き

三十餘年寢處なく

持律堅固にたもちては

目をあげ女人を見給はず

好食を得れば衆に供し

教化普く被むりぬ

勝劣校ぶる議論には

念佛の功德を證明す

服して念佛の門に入る

玄義の發明祈りしに

古今を楷定し給へり

寒冷に尙汗を爲し

道俗齊しく度し給ふ

袈裟を脱ことあらざりき

塵ばかりだも違はざり

名利に念を動かさず

己は麤食に身を支ふ

常に自から分衛して

凡そ信施を受ぬれば

淨土の變相畫ては

京幾の道俗化になびき

誦經念佛三昧の

或時人にのたまふに

我今西に還らんと

佛と及び二ぼさつよ

正念たがはで彌陀法の

樹上に端坐（化して

時に京師の士大夫は

高宗帝は徳を嘉し

牟尼の行儀にしたがへり

彌陀經寫して世にひろめ

散施し都鄙に弘がりぬ

身を捨て往生を欣ぶ者

發得せし者數知れず

此身は苦惱厭ふべし

寺前の高柳に登りては

神力我をたすけよと

中に不退を得せしめよ

投身自絶し給へり

至誠に骨を葬りぬ

寺額を光明と賜はりぬ

佛法東漸より已來

大唐彌陀の化身ぞと

## 大みおや

如來は衆生の慈父なり

天地萬を統べたまふ

清淨界に在しては

迷の衆生に應ひては

天地萬の備もて

我らが心を救靈てぞ

彌陀の慈悲いと深く

超世本願を示さんと

盛徳ためしなかりけり

傳へて稱讚止まざりき

三身一如に在して

偏一切る法身と

光明攝化ふ報身と

教を垂れます應身なり

衆生を育む目的は

竟に佛に成す爲めと

苦毒に沈む子らがため

光明名號を顯はしぬ

光明あかりあまね遍まく照てしては

光ひかりに三け垢がれも清きよめられ

平和へいわと歡喜くひんぎに充みたされて

此こゝに居ゐながら極樂ごくらくの

彌々いよ命いのちの終をはり

金銀こがねしろがねマニ眞珠しんじゆ

父子ふし相迎さうがうの朝あしたには

無上またなきくらゐ菩提ゆふべの昏くらには

## 十 界

法身おほみおや如來わかより分わかれ出でし

六凡はん四聖しやう十界かいの

念佛みなよぶ衆生しゆじやうを攝とらめます

身みをも心こゝろも安やすらけく

靈きよき心こゝろと生なりぬれば

聖衆せいしゆの員かみに數かずへらる

眞實まじやのみと報土うまに生うまるなれ

瑠璃るり寶石ほうせきの寶樓たかどのに

菩薩ぼさつの功徳くどく具そなはりて

十方よを度生たくふこと極きはなけむ

衆生しゆじやうの心こゝろに悉ことごとく

性能せいねい具うづさに備そなはり

心一つの爲す業の

淨穢苦樂の果報ひ

激苦間なき地獄は

飢と渴きの餓鬼てふは

互に噉み合ふ畜類は

鬪諍競合ふ修羅道は

人道を正しく行ふは

博く愛して最高き

善惡ともに三等わけ

無明の闇に彷徨る

四諦を悟る聲聞は

無明生死の夢醒めて

善惡迷悟の因縁により

十界の依正と現はるれ

極惡邪見の報ひとや

肉欲我欲罪による

愚痴横惡なる業に

驕慢り勝負を好むにぞ

人倫資格たる人ぞかし

行ひなるは天つ人

苦樂を受る六の道

流轉生死の凡夫なり

神通自在の身を證し

涅槃を得るは辟支佛

智慧ちゑと慈悲じひとが備そなりて

因圓果滿究竟あらゆるくじくそなはりて

二乘じようの解脫げだつは權かりにして

本覺眞如みづのものとに歸かへりては

二利兼行ふたりにすぐふは菩薩ぼさつにて

無上覺位またなきくらみは佛陀ぶつだなり

佛陀ぶつだの涅槃ねはんのみ眞理しんり

始本不二おやこひつの身みとならむ

### のりのいと

あみだほとけの法のりのいと

心こころの玉たまにつらぬきて

みなもろともにのちの世よは

同おなじはちすの身みとならば

この露つゆの身みはこゝかしこ　しばしがほどは別わかるとも

心こころはずすの緒をを通とほし　同おなじさとの身みとならん

のちこの經がみをよむひとは　おもひ出だすらむ花はなの上へに

なかばをちぎりしこの友ともを　ふかきまことの女をととして

清きよき御法みのりのいとぐちを　心こころにとほせ親おやも子こも

また兄弟きょうだいも友ともだちも　この一ひとすぢの法のりの絲いと

ともに心こころに貫つらぬきて　同おなじく無む爲ゐの身みとならば

親おや子こ夫婦ふうふも兄弟きょうだいも　六む親しん眷けん屬ぞく友ともだちも

一ひとの法のりの絲いととほし　同おなじく無む爲ゐの身みとならむ

# 育兒の歌

一

仰ぐも畏こきみ親より

預かりにける稚兒なれば

み旨の兒等になれかしと

たゞ旦夕にいのるなり

二

神聖正義のミオヤより

あづかりにけるこの稚兒を

もしもみむねに背かせば

われこそ地獄の薪なれ





光明

清淨光

五つの塵にまびれにし

我らが心のしぶごろも

清き光のみそゝぎに

きよめられてぞいさぎよし

歡喜光

ミオヤをおもひてよろこびの

光のなかにすみぬれば

こゝろはのどけき春の日の

園にあそぶにたぐひけむ

不斷光

すゝめやすゝめ御佛の

またなきくらゐの道とほし

断えぬ光をたよりとし

いやいさましくすゝめかし

## 入山學道

無明闇痴の雲はれて

舍那圓滿の月の顔

一度び肉の我となりし

慕ふ心は深けれど

是だに稱はぬ世なりせば

狭き心にあらなくも

堅き心の一筋は

金剛不壞の意思をもて

娑婆即常寂土

妙なる娑妙にして

本覺眞如の空清き

見まくほしさに戀へりなれ

罪の衣を被し身には

逢坂の關越え難く

活き存ふべき甲斐やある

深き思ひに沈みける

巖も徹すと聞くからは

恩愛繫縛の綱を斷ち

舍那清淨の法の身は

現在説法と聞きつれど

肉にくの心こころにつゝまれし

此し土どと彼ひ土どとは一ひと重えなる

されど濁にごりの世よになべて

しづけき山やまに入りてこそ

## 聖者の表情

無量壽經序文の意。是淨土教の秘鑰

清淨法界常住しやうじゆんぽうかいじやうぢやうの

威神いじんの光明くわうみやう永とこしへに

無明むみやうに迷まよふ子こ等らがため

釋迦牟尼佛しやくかむにぶつと世よに出いでて

譬たとへば西にしに日ひは入いるも

無明むみやうの雲くもに覆おほはるゝ

無明むみやうの雲くもぞ隔へだつなれ

塵ちりの巷ちまたを立たちいでゝ

靈きよき國くには聞きき見みむ

阿彌陀如來あみだにょらいの日輪にちりんの

十方じゅうぱう法界ぽうがい照てしては

方便ほうべん不思議ふしぎの力ちからより

慈悲じひの聖旨みかねを示しめします

光ひかりは月つきに映えいず如ごとと

彌陀常住の日光は

佛陀出世の本懐を

即ち世尊寂靜に

淨界彌陀の靈光は

爾時諸根悅豫し

光顔いよ々巍々として

恰も明淨なる鏡

如來清淨光明は

諸根はいとも清らけく

如來歡喜の光明は

一切諸佛の所住なる

如來智慧の光明は

牟尼滿月に照すなり

靈鷲の嘉會に現しぬ

彌陀三昧に入りぬれば

人佛牟尼の身に現じ

姿色も殊に清らけく

威容の光顯なり

影が表裏に暢る如と

世尊の感覺に映現し

微妙奇特にいましける

世雄の聖情に融合し

大我の中に安住す

世眼の智慧とあらはれて

衆生の無明を照しては

如來不斷の光明は

最高徳の範として

如來萬徳圓かにて

三輪完全の鑑もて

人佛牟尼は一心に

本佛彌陀の聖徳は

入我々入の神秘には

甚深不思議の感應は

如實の知見を示しぬる

世英の聖意に動きては

最勝道に導きぬ

天尊の身に現して

衆生に軌を垂れ給ふ

本佛彌陀を憶念し

牟尼の聖意に映現す

彼此の三業冥合し

即ち斯教の奥旨なり

諸根悅豫讚

彌陀の慈愛は永しへに

天と地とに充滿てり

三まやの床に融合うて

悅豫極み無りけり

慈愛に滿つる彌陀の面

朝日まばゆく輝ける

靈き姿を想ほへば

悅豫極みなかりけり

念佛三摩耶に心すみ

慈悲の聖旨に融合ふて

神秘不思議の靈威は

悅豫極み無りけり

我み佛の慈悲の面

朝日のかげに映ろひて

照るみ姿を想ほへば

靈威極まりなかりけり

春の氣にあふ櫻花

物こそ云はね樂しさは

色と香りに現るは

彌陀に觸れたる心かな

姿色清淨讚

譬へば西に日は入るも

光は月に映ること

無量壽王の日光は

牟尼満月に輝けり

まばゆく照す朝日かけ

金剛石に映ること

彌陀光王のみ光は

牟尼の姿に輝けり

譬へば明淨なる鏡

影は表裏に暢ること

彌陀の光に映へる

牟尼の姿の清らけし

無量光の朝日かけ

三まやの窓を照します

牟尼の金のみ姿に

色映ろひて清らけし

彌陀の光に映ろへる

牟尼の姿は清らけく

金の色は妙にして

世にまた比ひ無かりけり

光顔巍々讚

萬よろづの山やまに立ちこえて

須彌しゆめの峰みねは聳そびへけり

彌陀みだの朝日あさひに映うつろへる

牟尼むにの威神みじんは巍うづたかし

日月にちぐわつ摩尼まにの光ひかりさへ

隠かくれて墨すみの如ごとくなる

彌陀みだの威神いじんの極きはなきは

牟尼むにの光顔くわうげんに現あらはるれ

彌陀みだの神聖しんせいなる聖旨みむね

牟尼むにの光顔くわうげんに現あらはれて

威神いじんの光明くわうみょう極きはみなく

三千界さんぜんがいを震動しんどうす

天あまつ魔羅まらの吹ふき起おこす

百ひゃくの雷いかづち群ぐん雲うんも

み天そらさやかに照てらします

月つきには障さはりあらざりし

宇宙うちうに獨ひとり尊たかかりし

彌陀みだの威神いじんの極きはなきは

人佛にんぶつ牟尼むにと現あらはれて

光顔くわうげんけだかく輝かまやけり

## むつみの正因

聖きよき我等われらが教主をへぬし

過去むかし道意だういを發おこす時とき

花はなを分わける乙女子おとめこと

いもせのちぎり誓ちかひにき

せこが立たてたる志氣しき高たかく

妹いもが心こころの花清はなきよく

むつみてよきみを結むすぶまで 誓ちかひて仕つかへまつらるゝ

上またなきさとりを得えるまでは 世々よゝにたがはでむつみける

教をしへの祖おやの躅あとたかし

むつみの法のりのかしこけれ

聖せいなるみむねをせこはうけ 白しろくはいもをいざなひて

きよきむつみを結むすびては みおやにつかへまつるなり

上またなきめぐみをいもはうけ 赤あかき心こころをせにさしげ

高たかき天職つとめを助たすけては

聖惠めぐみに報いくまつるなり

## 正婚の頌

聖なる御名を稱へては

聖旨の現はれ仰ぐなり

如來の神聖なるみむね

尊く婚をなさしめよ

如來の上なき恩寵にて

和ぎ婚を結びませ

如來の正義なるみむね

正しく婚を成さしめよ

至眞にしていときよき

靈國をこゝに格れかし

至善にしていときよき

靈國をこゝに格れかし

至美にしていときよき

靈國をこゝに格れかし

如來の聖きみむねもて

圓かに婚を結びませ

# 聖き皇統

朝日かゞやく日の本の

紹かせ王へる一系の

畏き代々は民草を

聖なる世々は三寶を

中にも聖武の帝より

三十八主の天皇には

また歴代に亘りては

身を法體に改ためて

凡そ世界は廣くして

吾皇の代々ばかり

天津日嗣を萬代に

代々の天皇尊としな

子として愛撫し玉へり

法とし歸依し玉ひける

靈元帝に至るまで

落髮受戒し給へり

三百に餘れる王子等が

正法を護持し玉へり

國てふ國は多けれど

めでたき世々は又あらじ

おみなな模

いとも畏こき皇の

國つ萬の民草に

ひとり古今に英でにし

光明後の聖徳は

聖武の帝を助けては

悲田施薬の院を立て

大佛殿を始とし

深くも佛法興隆に

自ら誓ひて千人の

清き心の兆しとて

代々の國母の慈悲の露

かゝらぬ里こそなかりけれ

慈悲の權化と崇めらる

末の世までも照すなり

公私の二徳を布まして

天下の無怙を懲れみぬ

佛堂伽藍を建立し

力を竭し玉ひけり

病者を洗ふ浴室に

阿閃如來を感見す

后こうは一時清水あるとききよみづに

宛然まなごら活いける觀音くわんおんの

貴たかき賤いやしきをしなべて

恚いかあれかしと賢かしこくも

## 禮れい拜はいの範はん

あふぎぬかづく大宰府だいざいふの

道實公みちざねこうは母ははぎみの

汝なんぢが五いつつのとしのをり

危あやきいのちを觀音くわんおんの

御恩ごおんのほどな忘わすれそと

終身しゅうしんむねにをさめては

自みづから玉姿ぎよくしを寫うつせしに

慈悲じひの姿すがたと現あられぬ

佛ぼつを信しんずる女をらは

範はんを垂たれさせ玉たまふなり

神かみとまつらる菅原すがはらの

いまはのときの示しめしなる

重おもき病やまひにをかされて

大だい悲ひの力ちからに救すくはれし

こゝろこもれる遺言いごんを

つねに恭敬くつやうしたまへり

三世諸佛を拜禮し

または聖經寫すなど

斯も信仰深かりし

たうとき神とあがめては

五百の僧に供養なし

種々の功德をつもりけり

みたまにませば今もなほ

伏し拜むなり諸ひとが

## 不死の忠魂

あゝ忠臣と後の世に

今尙つきぬ橋の

信仰ふかき母ぎみが

拜ひと夢見てやどりしに

朝臣は三徳兼備へ

君に献げし命をば

譽を流す湊川

正成朝臣の生たちは

志貴の山なる多門天

多門丸とは名つけらる

忠誠古今に比なし

湊川原に消ぬれど

一度死して七度は

衛り奉らむ忠魂は

君に倣ひてわれくは

至誠の魂とこしへに

## 念佛將軍

生れかわりて王門を

いまにも活るいくさがみ

たとひ此身は盡るとも

死なぬつとめを勵まなん

三百餘年太平の

家康公は若き時

討死ときのおのれをも

大樹精舎に入ぬれば

諫と教へに隨ひて

此より運を開きけり

基を開く徳川の

主と頼みし義元が

自害せむとて香花院

山主の登譽上人の

自殺をととめ幡をあげ

其上人の示には

天下てんかに四民しめんとわかるれど

大みおやより命おほせなる

おもふて爲なば耕たがひも

大刀たち鐵砲てつぱうのつとめをも

斯かくも安心あんしんさだむれば

忘れぬ爲ために日ひびくくに

教をくを蒙かよりこゝろをも

激はげしく戦たたかふをりからも

天地ちのつち萬よろづもことごとく

佛ほとけまかせのまことろは

信しん仰ごうふかき公こうが身みは

戰場せんじやう度々たがの危難うきなんをも

職分しやくぶんは私欲しやくの爲ためならず

國くにの爲ためなり世よの爲ためと

耘くる業わざも菩薩ぼさつ行ぎやう

皆是みな佛道ぶつだう修行しゆぎやうなり

佛ほとけの慈悲じひと御恩ごんをば

六萬ろくまん稱しょうを唱となへよと

生うれかわりて是こゝよりは

念ねん佛ぶつ忘わすることぞなし

佛ほとけの力ちからと信しんすれば

必かなず成せい功こうなすものと

劍けんや玉たまにも侵をかされず

のがれて國くにを治をさめしは

佛の力と量りなき

山をきりぬく六字とは

## 感謝の歌

壽はみだのちかひにて

なると自信を表はしぬ

天は何ともいはねども

春は芽生て夏しげり

大親のおきては意なき

まして心の有る身より

萬の物をいつくしみ

神聖正義をしめします

恩寵を御名に表はせり

救ひの御手に攝められ

四時は常を過まらず

秋は實りて冬收さむ

草木も守りて違はじを

仰げば彌よ尊としな

心を照らす靈光は

罪にほろびし我等には

稱へて聖意を信賴なげ

光の裡に潔ぎよく

常恒とほに閑のこけき心地こころして  
 もはや此身このみは終おはりなき  
 悦よろこび勇いさみて日ひ々に日びに  
 常つねに感謝かんしゃの心こころもて

安やすくぞ此世このよを暮くさるゝ  
 壽いのちの中なかの生命いのちぞと  
 聖きよきみむねを畏かしこみて  
 命いのちせの職つとめをはげまなん

## 大經讚佛偈

如來にょらいの光顏くわうげんうづたかく  
 日月にちぐわつ摩尼つまにの光ひかりさへ  
 如來にょらいの容顏ようげん世よに超こえて

威神ゐじんの徳とくは極きはみなく  
 隠かくれて墨すみの如ごとくなり  
 外ほかに比くらぶるものもなし

正覺しやうかくの音高おとたかくして

正義せいぎと多聞たもんと精進しやうじんと

威徳ゐとく比くらぶるものもなく

深く諸佛しよぶつの法界ほふかいを

悟さとの海うみの底そこひなく

無明むみやうと怨うらと怒いかりとは

人天にんでんの中なかたぐひなく

無量むりやうの功徳くどく備そなはりて

光明くわうみやうの威相ゐさうおごそかに

十方界じやうぱうかいにひゞきける

禪定ぜんぢやう三昧さんまい智慧いちゑふかく

殊ことに勝すぐれて不思議ふしぎなり

照てらさぬくまもなかりけり

極きはなきみそら盡つくします

世界せかいに絶たえてまします

神徳じんとく量はかりなかりけり

智慧ちゑ深明しんみやうにましまして

大千界だいせんかいを震動しんどうす